第１章　宇陀市の概要

　観光基本計画を立てるために必要な基本的な宇陀市の情報をまとめます。宇陀市の歴史、地理的特徴、人口、産業の状況を示します。

1.1　宇陀市の概要

本市は、高原に立地する自然環境豊かな地域特性を持ちながらも、京都・大阪方面、名古屋・伊勢方面へのアクセスは比較的整備されています。近隣市町村への交通網を持つ京阪奈を代表する緑豊かな地域です。そして、歴史的・文化的資源が息づく街であり、観光地としてのポテンシャルの高さを感じさせます。ここでは、本市の概要について述べます。

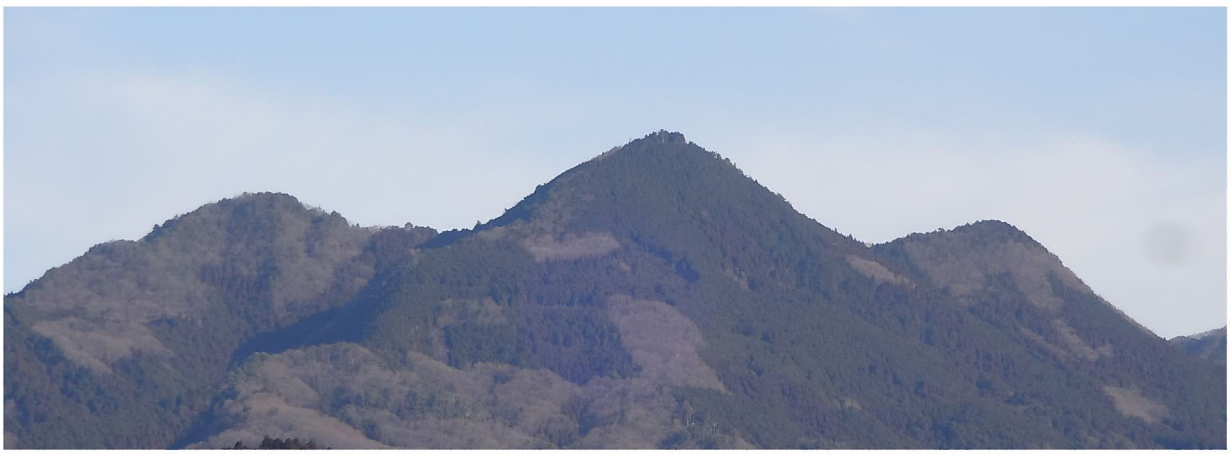
1.1.1　沿革

本地域の歴史を遡ると、『古事記』には、蘇邇（曽爾（そに））谷の地名が記載されています。また、「日本書紀」には、推古天皇の時代に菟田野（うだのの）（宇陀郡榛原町）で、薬猟（くすりかり）といい、強壮剤にする目的で鹿の若角をとるための狩を行う場となっていたことが記載されていること等から、古い歴史を持つ地域であることがうかがえます（倉野他 (1971)『古事記祝詞』、井上 (1988)『日本書記　下』より）。そして『万葉集』では、柿本人麻呂の秀歌「ひむがしの野にかぎろいの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」が詠まれた地として有名です（佐竹他 (2017)『万葉集』より）。

平安時代以降は、この地域は興福寺の荘園となっていました。南北朝から戦国時代にかけては北畠氏の勢力下にありましたが、江戸時代には、宇陀松山藩による統治の後に、幕府の直轄地になっています。この間の、室町～江戸時代に庶民の「お伊勢参り」が盛んであった時には、そのルートとして、また、大和と伊賀・伊勢を結ぶ東西の交通の要衝でもあったため、宿場町として栄えました。

明治元年に奈良府を経てその後、奈良県となりましたが、再び他県との合併・併合の経緯の後、明治 20 年に奈良県が設置され、この地域は「宇陀郡」に所属することになりました。その後、明治 22 年の「町村制」の施行により、宇陀郡は 1 町 11 村から構成されることになりました。

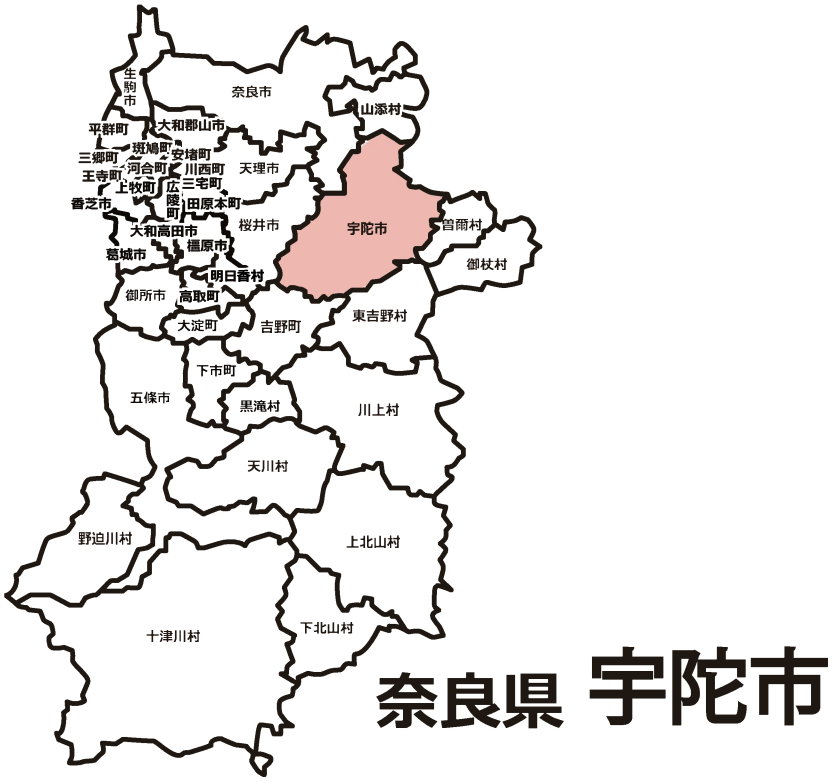
昭和 17 年には、松山町、神戸村、政始村、吉野郡上竜門村が合併して旧大宇陀町が誕生しました。戦後になって、旧菟田野町、旧榛原町、旧室生村が合併・編入により誕生し、平成 18 年 1 月に、これら旧大宇陀町、旧菟田野町、旧榛原町、旧室生村が合併して、「宇陀市」が誕生しました（宇陀市ＨＰより）。



1.1.2　位置と地勢

本市の位置は、奈良県の北東部にあたり、北は奈良市、山添村、西は、桜井市、南は吉野町、東吉野村、東は曽爾（そに）村、三重県名張市に接しています。総面積は、247.62 ㎢あり、大和高原と呼ばれている高原地帯に位置するため、山林が全土地面積の 72%を占めています。

近鉄大阪線によって、京都・大阪方面や名古屋・伊勢方面と結ばれ、また、道路網では、西名阪自動車道により大阪方面への車によるアクセスも整備されています（宇陀市ＨＰより）。



１.１.３　人口の状況

人口構成をみると、平成 27 年現在の総人口は 31,516 人で、そのうち男性は 14,858 人、女性は 16,658 人となっています。年齢別人口比率は、14 才未満は 9.4%、15 ～ 64 才は 54.5%、65 歳以上は 36.1%、75 才以上が 18.1%と、少子高齢化の傾向がみられます。(国立社会保障・人口問題研究所資料より)。

就業人口の動向を、平成 17 年の国勢調査結果からみると、本市の就業者の総数は、17,239 人で、20 年前と比較すると 2079 人減少していますが、総人口に占める割合ではほぼ変化がありません。また産業分類別の構成割合をみると、第一次産業と第二次産業の就業割合は減少し、第三次産業の割合は増加しています（宇陀市ＨＰより)。

１.１.４　産業の現状

本市の基幹産業は農林業で、これらの再生・活性化が施策の基本目標の第一となっています。具体的には、その１に 1400 年の伝統を受け継ぐ「薬草のまち宇陀」という薬草プロジェクト事業があり、その２には、高原野菜等のブランド化に基づく「特産品等認定開発補助事業」があり、その３には、宇陀産材の普及及び森林の保全に基づく「木材出荷促進事業」があります。